

# 「年青的時候」を読む

— 潘汝良と西洋

河 尻 和 也

## 0. はじめに

「年青的時候」<sup>1</sup>は、張愛玲が1944年2月、上海の文芸雑誌『雑誌』第12巻第5期に掲載した短篇小説である。同小説は、同年9月、張愛玲が同時期に描いた小説9編とともに、小説集『伝奇』(上海街灯雑誌社)として出版され、11月には、新たに小説6篇が加えられた『伝奇増訂本』(上海山河図書公司)として再販された。

「年青的時候」を考察した先行研究には、趙静(敬称略、以下同じ)の論文「伝統と近代の狭間」がある<sup>2</sup>。趙の論文では、1940年代当時の上海の時代背景のもとに、主人公、潘汝良の持つ理想(西洋崇拜)が、いかに当時の中国の「現実にはぶつかり失望したのか」(p. 131)、に重点が置かれ分析が行われている。また同論文は物語を張愛玲の随筆「洋人看京劇及其它」(1943)などと対照させて、汝良の変化から張愛玲の中国人観を読み取っている。

一方、台湾の研究者、蔡源煌、温毓詩の両氏は、張愛玲の小説全体をオリエンタリズムやポスト・コロニアリズムの理論を用いて考察する中で、「年青的時候」の分析を行う<sup>3</sup>。両氏の論文では、主人公潘汝良が、ロシア人女性シンシアと出会う中で、彼がいかに西洋文化と決別し、自国(中国)の文化に誇りを持つようになるのかを中心として論が進められている<sup>4</sup>。

上記の論文においても指摘されるように、私は「年青的時候」において、潘汝良の理想として西洋が存在した事、そして彼がシンシアと出会うなかで、彼の理想に対する思いが揺らいだという点で、共通の意見を持っている。しかしながら、私は趙論文が述べるように、汝良がシンシアに「失望」して、彼の西洋文化に対する思いを喪失したのだとは考えない<sup>5</sup>。また、蔡源煌、温毓詩の両氏が述べるように、物語の結末で汝良が単純に自国(中国)の文化に誇りを持ち、自由を手に入れた、とも考えない<sup>6</sup>。

「年青的時候」という小説は、小説集『伝奇』における、他の作品が有するように、当時の上海における人種間の問題、そして張愛玲自身の文明と文化に対する思いが描かれた小説であるということが出来る。私は本論文において、前掲した先行研究において提示された論点を基に、「年青的時候」の主人公潘汝良の変化を分析し、その中から張愛玲自身の文明と文化に対する考えを分析してゆきたい。

## 1. 上海租界の歴史について

ここでまず、本論における以降の考察のために、「年青的時候」の舞台となっている上海の歴史を簡単に紹介する。

上海に租界が設置されたのは、アヘン戦争（1840年～1842年）が終結して後の1843年である。イギリスのアヘン戦争に対する目的は、清国とのアヘンを含めての自由貿易にあった。清国は1842年に締結された南京条約により、上海、広州、福州、廈門、寧波の5港を開港する。

1845年、後に上海の初代イギリス領事となるバルフォアは、清朝の地方官で上海の行政実務を担当した、上海道台の宮慕久と第一次土地章程を議定し、イギリス租界の設置が決定された。その後、欧米列強による中国侵略が続々と開始され、1848年にはアメリカ租界が、1849年にはフランス租界が開設される（1863年、英・米両租界は合併して共同租界となった）。

開港前の上海は人口約50万人の小さな商業都市であった。しかしながら租界の設置を機に、中国内地からの人口の流入が始まる。1840年代、中国人は租界に住む事を禁じられていたが、1854年の第二次土地章程以降、中国人の居住が認められ、租界内に住む中国人の数も増大し、「華洋雑居」の状態が始まった。

租界内の行政は、イギリス人・アメリカ人・フランス人の官吏からなる、上海工部局によって行われた。後にフランス租界は工部局から分離し、公董局を設立し独自の行政を行うこととなる。しかし、いずれの租界においても中国人は、各種税金を納めていたにもかかわらず、政治的発言権を持たず、民事的な権利の保障を得る事ができなかった。このように、租界における中国人の權益とは限られたものであった。馬林長は『租界里的上海』の中で、物事には両面性がある（租界における文化の発展）としながらも、「租界制度は、本質的に見て植民地主義の統治制度であった」と述べている。

またハリエット・サージェントは、著書『上海』で「上海を白人優位の植民地と単純に考えることはできない」<sup>9</sup>と述べている。この言葉は上海の租界に住む、白人の境遇の多様性を意味している。上海には、イギリス人、アメリカ人、フランス人のほかにも、ドイツ人<sup>10</sup>、ロシア人、ポルトガル人、スペイン人など多くの西洋人が居住していた。しかしながら、ロシア人、特に白系ロシア人の境遇は酷いものであった。

1917年の10月革命の後、難民となってハルビンや上海になだれ込んだ白系ロシア人は困窮し、彼らの中には乞食をして生活するもの、金のために娼婦に身を落とす女性が少なく無かった<sup>11</sup>。中国人は、「はじめて白人たちがそのような下賤な仕事をするのを眺めて、驚きの目をみはった」<sup>12</sup>のである。このような中で白系ロシア人は、上海租界当局、およびその他の居住外国人により、「上海における西洋人の“榮譽”を、“貧しい白人”によって損なわれる」<sup>13</sup>と見なされ、その余波を受けたロシア人も「二級市民」<sup>14</sup>と考えられるようになった。

このような、多様な人種の共存、そして欧米列強の植民地統治が続く中で、上海では中国旧来の文化と外来文化が融合し、「中国の中の西洋」<sup>15</sup>と呼ばれる独特な都市文化が形成されてゆく。上海の海の玄関であるバンドには、ヨーロッパ風の風景が見られ、ヨーロッパ式建築、劇場や映画館などが建ち並んだ。上海の欧米人は毎晩のように晩餐会を開き、乗馬、テニス、クリケットに興じていた。しかし一歩角を曲がれば、白系ロシア人娼婦や、中国人の乞食がはびこる卑しくみすばらしい一面を有していた。

「年青的時候」の舞台となる1940年代前半の上海は<sup>16</sup>、日本軍による共同租界の占領が行われ、工部局における日本軍の支配が強まった時期でもある。それまで租界を我が物としていたイギリス人や、アメリカ人は、日本軍により強制収容所に入れられ<sup>17</sup>、彼らの多くは上海から本国へと引き上げた。そして、租界における多くの建物は破壊され、上海では激しいインフレが巻き起こっていた<sup>18</sup>。

## 2. あらすじ

「年青的時候」では、全知の語り手により、潘汝良の過去が物語られる。以下に、物語のあらすじを紹介する。

物語の舞台は、1940年代前半の上海の租界。主人公潘汝良は、大学で医学を学ぶ学生であった。彼には子供の頃から一つの悪い癖があった。彼は勉強して

いる時に鉛筆を握ると、いつも教科書の上に人間の横顔を書き込んでしまうのである。その絵には、髪の毛がなく、眉毛もない、額からあごまでの輪郭のみの一筆がきである。見た所、その絵は鼻が高すぎることから中国人の横顔でないことは明らかである。

汝良は愛国的な好青年であるが、中国人にはほとんど好感を抱いていない。彼が知っている中国人とは彼の両親と兄弟たちであった。彼は父親や母親、そして二人の姉、弟、妹といった自分の家族に対して「かわいそうな人」(p. 185)、「身の程をわきまえない」(p. 185)と、冷たい感情を抱いている。それに対して、彼が憧れ、信頼するのは、西洋の医学や現代科学、ジャズ、珈琲といった、近代を象徴する、光輝くものであった。彼は大学で医学を修めて、古臭い自分の家族の世界から抜け出したいと考え、大学の授業が終わった後も、外国語専門学校で医学のためにドイツ語を学んでいた。

あるとき、汝良が専門学校での休憩時間、休憩室で復習をしていると、校長室でタイピストをしているロシア人女性、シンシアと出会う。彼はシンシアを一目見た途端、自分がいつも教科書に描く横顔と、うりふたつの人物であることに気が付く。汝良はシンシアこそがまさに理想であり、母親や姉たちと比べて、彼女が別の世界に属していると考えられるようになる。彼はシンシアを美しいもの全てと結びつける。汝良とシンシアは互いにドイツ語と中国語を教えあう仲になる。しかしながら、汝良はシンシアを知るにつれて彼女が自分の理想と異なっている事に気が付いてくる。だが、彼は全てがわかると夢が壊れると思いい、彼女の詩的な部分のみに恋をしようと考える。

汝良はシンシアが自分に好意を持っていると考えていた。しかしながら、彼は映画の広告「自由魂」を見て、自由を失う事が惜しいと考え始め、シンシアに求愛するという考えを無くす。汝良はこれ以上彼女にドイツ語を習うのは危険だと考え、彼女に別れを告げようとする。だが、シンシアが口にしたのは、彼女がロシア人の下級警官と結婚することになったという知らせであった。汝良は自分がどれほど愚かであったかと考えるとともに、彼女が「結婚のための結婚」(p. 197)をすることになったのではないかと心配する。

汝良はシンシアから招待を受けて結婚式に出席する。結婚式はロシア式礼拝堂で行われた。汝良がそこで見たものは、みすばらしい司祭と、落ち着きのない新郎、そしてそれとは対照的に一生に一度しかない結婚式を精一杯祝おうとするシンシアの姿であった。汝良は彼女の姿を見て悲しみが込み上げ、涙がこ

ぼれそうになるのを我慢する。シンシアの結婚後、汝良はシンシアの家に行き、生活につかれ病気を患っているシンシアの姿を見る。

汝良の教科書に横顔を描く癖はそれ以降なくなる。

### 3. 「年青の時候」を読む

本節では、「年青の時候」に登場する人物と、彼らの境遇、思考に対する分析を行う。また、先行研究で指摘がある部分については論中において言及し検討してゆく。

#### 3.1 潘汝良の理想

まず主人公の潘汝良である。彼は比較的裕福な味噌問屋の息子であり、大学で医学を学んでいる。中国を愛しているが、興味を抱いている訳ではない。彼の知っている中国人とは、彼の両親と兄弟のみであり、旧習に染まった自身の家族に対し反発を感じている。

一方、彼の思い描く象徴的な西洋とは、「映画のスターとタバコや石鹸の広告のモデル」(p. 184)であり、教科書を開くと無意識的に西洋人の横顔を描く。汝良は先行研究でも指摘されるように、西洋人に対して憧れを抱いていると考えられる<sup>10)</sup>。彼は現代科学(西洋文化)を「この不完全な時代にあって唯一非の打ち所の無い素晴らしいものである」(p. 190)、と考えている。

汝良の描く西洋人の横顔の特徴について、張愛玲は以下のように語り手に語らせている。

汝良は自分が目と口を描けないことをどう説明して良いかわからなかった。彼は横顔の線を除いては何も描くことができないのである。(p.187)

このような汝良の西洋人の輪郭のみのスケッチとは、彼の知っている西洋人が映画スターや、広告のモデルのみであり、現実の西洋人ではないことの隠喩となっている。また、汝良が目を描けないことは、彼が西洋人の視点がわからないことの、そして口が描けないことは、西洋人がいかに世界を表現するかがわからないことの隠喩となっていると考えられる。

汝良とシンシアの出会いは、汝良の現実生活で、彼が初めて現実の西洋人と出会う、偶然の出来事として描かれている。

先にも述べたように、彼の描くスケッチ——輪郭としての西洋人とは、彼が上海の都市文化の中から様々なイメージを元に、構成し見出した〈幻想／輪郭〉の西洋人である<sup>20</sup>。そのため、彼とシンシアとの〈出会い～恋〉とは、彼自身の理想である、象徴的な西洋人という幻想空間に、シンシアの姿が一致したことに他ならない。

シンシアに恋をして、汝良は自転車で彼女に会いに出かけるとき、理想の女性に出会った気持ちから、心を躍らせて次のように考える。

生きる者の太陽は、死者を照らす事は無い。(p. 189)

この汝良の内面描写が意味するものも、〈太陽＝汝良の幻想の西洋／シンシア〉であり、〈死者＝中国／自分の家族〉といった彼のイメージである。

汝良はシンシアに出会った当初、彼女を「聖マリア像のようだ」(p. 186) と思い、彼女こそ自らの理想を体現する女性(汝良の「西洋」の人格化)であると考える。

### 3.2 汝良の幻想・幻想の維持

汝良はシンシアと互いに語学を教え合う約束を交した。彼は自らの理想の女性に出会う事ができた喜びと、シンシアが自分に親しく接してくれる事から、自分は彼女を愛しているのではないか、彼女も自分の事を気に入ってくれているのではないだろうか、と考える。

彼女に出会うために、自転車でシンシアの勤める外灘の商社へ向かう。汝良はその途中、洋館の中から聞こえる紹興劇の音色を耳にする。

洋館と紹興劇の持つ意味について、趙静は論文「伝統と近代の狭間」で、張愛玲の随筆「自己的文章」(1944)を参考に、当時の中国の急激な変化と、そこで生活する中国人の感情を読み取っている<sup>21</sup>。

この時代の中で、古い物は崩壊し、新しいものが育っていきます。ただ、時代の高潮がやってくる前に、物事がはっきりとするのは、ただ例外にすぎません。人々は日常生活の全てに不確かさを感じています。(中略)人々は自分が見捨てられたのだと感じています。自分の存在を証明するために、少しばかりの真実を掴みます。最も基本的なものは、古い記憶の助けを借

りざるを得ません。人々が全時代の中の記憶を元に生活する。これは未来を望むよりもさらに明晰で、親しみがあります 220。

引用部に示されるように、人は変化する新しい時代において、自らの存在をつなぎとめるため、古く確かなものを頼りにする。洋館の中から聞こえる紹興劇の音色とは、趙静も指摘するように、先行きが見えない時代の中で、古い記憶に助けを求めようとする、当時の中国人の姿に他ならない。

洋館から聞こえる音楽に汝良は嫌悪感を覚え、「文化の末日だ！こんなステキな場所に住む女主人も母となんらかわらない」（p. 190）と、考える。汝良の嫌悪感が意味するものとは、「万能な西洋」に、「遅れた古来の中国」が交じり合っている、洋館の「奇妙な姿」である。彼はその「奇妙な洋館」を見て後、すぐにシンシアを近代西洋が代表する「万能なもの」と結びつけ、「シンシアは（旧来の世界とは）別の世界に属している」（p. 190）と考える。

しかしながら汝良は、別の屋敷から聞こえる紹興劇の「思えば、思うほどに募る悔やみ」（p. 191）という台詞を聴いて動揺する。

汝良は突然悟った。紹興劇を聞く観衆の世界は一つの穏やかな世界なのだ——穏やかでないのは自分自身だ。汝良の心の中は混乱していた。（p. 191）

ここで汝良が示す動揺とは、周囲の環境が過去を自らの内に保持しているのに、ひたすら西洋へと、突き進む自分の態度が穏便ではないのではないかという彼の自覚である。

このような混乱の中で、彼はシンシアと出会い、彼のシンシアに対する印象は少しずつ変化を始める。

以下は、汝良がシンシアの会社で彼女に出会った時のシンシアに対する印象である。

汝良は一瞬驚いた——彼女は彼の記憶の中の人物と違っていいようだ。（中略）今、目にしているのはまづまづの容貌だが平凡な少女だった。（中略）汝良がやってきたのに気がつくと、紙袋を丸めてごみ箱に投げつけた。（p. 191）

汝良は仕事場でシンシアに出会い、彼女の容貌や態度に、戸惑いながら彼女が自分の「記憶の中の人物と違っている」、と気が付く。しかしながら、彼は自分の理想を保持するために「彼女は血の通った人間なのであって、自分（汝良—河尻注）の見る漠然とした夢ではない」（p. 191）、と考える。

さらに汝良は、シンシアとさらに親しくなって、出会いを重ねるうちに、汝良は彼女の姿が自らの理想の西洋——唯一非の打ち所の無い素晴らしいもの、とは異なっていることに気が付く。しかしながら彼はここでも自己の幻想（シンシア＝万能の西洋）を維持するために、あえて盲目になろうとする。

時に汝良が菓子を抱えてやってくることもあった。すると彼女は皿代わりに教科書を開くと、砂糖の粒や胡桃の屑を本の上に撒き散らし、平気でそのまま本を閉じてしまう。汝良はそうしただらしなさが嫌いだったが、つとめて見て見ないふりをした。彼女の詩的な部分だけを選んで見つめ、そこに浸っていた。汝良は自分が愛しているのはシンシアでないことがわかっていった。恋愛のための恋愛なのだ。（p. 193）

このような彼の（理想／幻想）も、彼女の現実の境遇（結婚）によって、変化を余儀なくされてゆく。

### 3.3 シンシアの現実

ここで汝良の変化の原因を探るために、シンシアの境遇について簡単に触れてゆきたい。併せて、先行研究においてシンシアという女性がいかに捉えられているか、についても言及を行う。

シンシア・ロブシャヴィッチ。彼女の母は寡婦であった。シンシアの姓、ロブシャヴィッチは継父の姓。彼女は家計のために、昼間、外灘の商社で仕事をし、夜は外国語専門学校で事務のタイプライターの仕事をしている。結婚に悩む妹がいる。

張愛玲により彼女は、幼い頃をハルビンで過ごし、上海へやって来た女性であると設定されている。彼女の年齢について具体的な記述は存在しないが、汝良が恋に落ちた事、そして彼女の妹がまだ若い事からも、汝良と同じ位の年齢（20歳前後）であるという事ができる。このようにみると、彼女が上海へ移り

住んだ時期は、物語における彼女のおおよその年齢から考えて、1920年代後半から、1930年代前半であると考えられる。

当時、ロシア人が、上海へ移り住んだ理由には、二つの事件が考えられる。一つは、1929年の中ソ紛争であり、この時期には多くのロシア人難民がハルビンから上海へと移り住んだ。もう一つは、1932年の日本軍による「満州国」建設である。日本軍による「満州国」の建設は、東清鉄道に勤務していた多くのロシア人の職を失わせ、生活に切迫した彼らは上海へと移住した<sup>230</sup>。

上海のロシア人は、1917年の10月革命による難民の増加で、租界における地位を低下させていった。彼らはフランス語を教養としていたため、多くがフランス租界に固まって住んでいた。1930年代になると、経済的に成功し安定を得たロシア人は、フランス租界の霞飛路に固まって住むようになり、高級アパート、商店、劇場、レストランなどが次々に建てられた。しかしながら、30年代に最も栄えていた上海のロシア文化は、1937年夏の日本軍による盧溝橋と上海への侵略戦争により、突然の終局を迎える。

「年青の時候」において、シンシアの過去について詳細な言及はなされていないものの、彼女と彼女の家庭の境遇、彼女の結婚から考えて、シンシアは裕福でないロシア人難民として描かれている事がわかる<sup>240</sup>。

シンシアの境遇は彼女自身によって、自分の国の言葉ではない言語——中国語によって表現される。そしてその境遇は、彼女自身の困難な現実を映し出す。

(シンシアは)話題が無くなると、家のことを話した。母親は寡婦だったが再婚して、ロプシャヴィッチは継父の姓であること。妹が一人いて、ルチアということ。継父も商社で働いているが、その給料では一家を養えず、かなり切迫していることなどである。彼女の語彙は限られていて、話す言葉は硬く拙くなり、その話は彼女の最もぎこちない、潤色のない現実を反映した。(中略)「ルチアは悩んでいます。」汝良が「どうしたのですか」と聞くと、シンシアは「結婚のため」と答えた。汝良は驚いて言った。「ルチアはもう結婚しているのですか？」シンシアは言った。「いえ、まだだからです。上海ではよいロシア人がとても少ないのです。イギリス人、アメリカ人も少ないです。今ではいなくなりました。ドイツ人はドイツ人としか結婚しません」(pp. 192-193)

以上の描写は、シンシアと彼女の家庭の現実を表している。蔡源煌は論文「従後植民主義的観点看張愛玲」の中で、「欧州人は常に2元的対立を採用し、白色人種は植民者であり、被植民者の有色人種との交際はしない」と述べている。また、温毓詩は、蔡源煌の論を基に自己の論文「張愛玲本文中の人物心理興殖民文化研究」において、同様の見解を示している<sup>25</sup>。

両氏の考察では「年青的時候」における、シンシアを植民者、汝良を被植民者として捉え、シンシアたちの結婚に、白色人種の植民者が有する人種的優越感を読みとっている。しかしながら、上海の租界において「二級白人」と考えられていたロシア人にとっては、租界における他の白人との結婚は容易ではなく、両氏が述べるよう彼女らの結婚を単純に植民地における同人種間による排他的な婚姻であると考えerわけにはいかない。実際に上海のロシア人たちは、中国人との結婚も多く行っている<sup>26</sup>。

また、引用部からもわかるように、シンシアは中国語を用いて会話を行おうとしている。上海の租界において、イギリス人が中国語を覚える事が、同人種の間で「不思議な目」で見られ、「頭がおかしい」と考えられていたことから考えると<sup>27</sup>、張愛玲がシンシアを単に植民地における植民者と描いていない事は理解されよう。

### 3.4 汝良の変化

物語の最後で、シンシアは工部局警察につとめる幼馴染の「ハンサムな青年」と結婚する事となる。本節では、汝良の変化が意味するものが何かを理解するために、汝良の視点、そしてシンシアの結婚が張愛玲によっていかに描かれているか、に焦点を当てて考察を行う。

#### 3.4.1 汝良の視線と内面

前節でも述べたように、汝良は自らの理想を維持するために、「恋愛のための恋愛である」(p.193) ことに盲目のふりをした。シンシアへの憧れを信じる汝良は、「軽率な結婚は自分の人生を破壊してしまいかねない」(p.195) と考えながらも、依然としてシンシアに対する憧れを信じ、シンシアとの結婚に思いを馳せる。

彼女が（シンシアー河尻注）その話（汝良のプロポーズー河尻注）を聞いて

たら、承諾するかしないかはさておき、彼女もやはり同じように興奮するに違いない。もしも彼女が承諾したとしたら、彼の家はきっと天地がひっくり返ったような大騒ぎになるだろう… (p. 193)

以上に見られる汝良の内面描写は、自分がもしも彼女にプロポーズを行ったならば、シンシアがその言葉を喜ぶであろうという、彼の期待感が表わされている。

しかしながら、ある春の日、ドイツ語の教科書の「どんなことであれ、軽率にしてはいけません」(p. 195) という例文、そして「自由魂」という映画の広告を見て、汝良は自由の大切さに気が付く。

自由は貴重だからこそ扱いにくいものようだ——自由な人間があちこちで頼づいて、自らの自由を引き取って下さいと人々に手を合わせている。汝良は初めてそのことに気が付いた。気付いたとたん、シンシアへ求愛するという考えはなくなってしまった。あと何年かは若者でいたかった。(pp. 195-196)

このように汝良はシンシアが自分の事を愛しているという仮定のもと、シンシアとの結婚を行えば「自分の自由がなくなる」と考えて、彼女に別れを打ち明ける決心をする。

シンシアと最後の面会を試みる汝良であるが、汝良は突然、シンシアから彼女自身の結婚について告白される。

シンシアはまっすぐ前を見ていたので、汝良のよく知っている横顔が、強調された、舞台背景のようなその緑色と対比をなし、異常なほど輪郭を際立たせていた。頬は少し赤みがさしているようだった。しかし、その顔に喜びの色はなかった。

汝良は言った。「教えてください。彼はどんな人なのですか。」

シンシアの澄んだ大きな瞳は、心に何か引掛かりがあるのを隠すことができなかった。彼女は自分を守るような、そして警戒するかのような表情で答えた。

「彼は工部局警察<sup>28</sup>で働いているの。私たちは幼馴染よ。」(pp. 196-197)

張愛玲はシンシアが結婚を汝良に告白する際、シンシアの顔色を、汝良の視点から、「喜びの色はなかった」と語らせている。ここで見られる張愛玲の描写は、これまで汝良が輪郭しか見ようとしなかった西洋人の顔に、現実の表情が与えられる場面である。シンシアは汝良の問いかけに「警戒するような表情で」結婚相手を答える。これは後に描かれるロシア教会での結婚式における、シンシアの境遇に対応していると考えられる。

ここではまず、シンシアの結婚を汝良がいかにかえているのかを見てみよう。

それは世間で最も自然なことだろう——若くてハンサムなロシア人の下級巡査で幼馴染。だが汝良は知っていた。もしも彼女にもっと良い話があったなら、決して彼とは結婚しなかったはずだ。汝良自身も十分まぬけだった。恋愛のための恋愛とは。だが自分の愛する女性をもっと取り返しのつかないことをする羽目になったのではあるまいか——結婚のための結婚を。  
(pp. 196-197)

このように、汝良はシンシアの結婚がお金のための「結婚のための結婚」であると考えている。また汝良は自分が「十分まぬけだった」と考えている。それは素晴らしいもの全てと結びつけ、愛し、自らの理想として掲げたシンシアが、安直な行為をしようとしていることに対する彼の幻滅であると考えられる。

### 3.4.2 シンシアの結婚式

幾月かが過ぎるとシンシアの結婚式は、みすばらしいロシア式礼拝堂で行われる。最後に結婚式におけるシンシアの態度と、汝良の視点を追ってみる事にしたい。

司祭は背が高く整った顔立ちのロシア人だったが、酒の飲みすぎのせいで顔が赤くむくんでいた。(中略) 聖壇の後ろから静かに輔祭が盆を手にやってきた。あばたのあさ黒い顔をした中国人で、黒い僧服の下から白い竹布綿のズボンが覗き、素足に靴を履いていた。(中略) 新郎は不安を感じているようだった。彼は落ち着きのない金髪の青年だ。古典的でまっすぐな鼻をしていたが、見たところ大して出世しそうになかった。彼は着古した

白いスーツをぞんざいに着ていた。新婦の方はそれに反して立派な白い緞子の礼服を着ていた。汝良のそばの二人の老婦人は、その服が貸衣装だの、いやきつと誰かに借りたに違いないなどと、顔を寄せ合いひそひそ話をしていた。(pp. 197-198)

汝良の視線が捉える、牧師の表情、「ハンサムな夫」の様相、夫の職業、そしてシンシアの借り物の礼服からもわかるように、彼女の結婚式は経済的に非常に困難な状況で行われていることがわかる。

以上の引用部では、汝良の側にいる二人の老婦人はシンシアの衣服について文句を述べている。先の引用部でシンシアは、「喜びのない顔色」「警戒するような表情」を見せていた。以上の引用部からわかるように、その理由には、シンシア自身、自分の結婚が周囲の人間からいかに見られているかを理解していたことを意味する。そのため、シンシアは結婚を告白する際に、具体的に彼女の結婚相手を聞こうとする汝良に、「警戒するような表情」で答えたのである。次にシンシアの結婚式における、汝良の内面描写を見てみる。

汝良はシンシアに感服せずにはいられなかった。それ故にすべての女性にも。結婚の式典全体の中でシンシア一人だけが美しかった。彼女は自分のために美しい思い出を作ろうと決心しているようだった。白い蠟燭を手に持ち、敬虔に頭を垂れていた。顔の上半分はベールの影に、下半分は蠟燭の影になっていた。揺れ動く光と影の中で彼女のかすかに蒼ざめた微笑が見えた。彼女は自分自身のために新婦に相応しい神秘さと厳かさを醸しだしていた。たとえ司祭がやる気のなさそうな様子をし、輔祭の男が目にも余るほど不潔で、新郎が面倒くさそうにしている。彼女のドレスが貸衣装か誰かに借りてきたものだとしても。一生に一度しかないこの日はどうしても記憶に値するものでなければならなかった。年老いた時の思い出として残すため。汝良は悲しみが込み上げ、目頭が熱くなってきた。(p. 198)

シンシアは自分自身の結婚が限定された婚姻の範囲内の行動であることを知っている。そしてそれは彼女の結婚にそれ以上の選択の自由が存在しなかった事を意味している。

彼女は自らの夫となるロシア人警官を「ハンサム」であると言っているが、

しかし汝良の視線がとらえた彼女の夫の姿は、「落ち着きのない」、「見たところ大して出世しそうにない」青年であった。

汝良はシンシアが周囲の冷たい視線にさらされながらも、「シンシアだけが美しかった」と、自らの結婚式を美しい思い出として残そうと振舞う姿に敬服し涙する。汝良のこの涙が意味するものは、汝良が以前シンシアに対して示したような「結婚のための結婚」という幻滅ではなく、シンシアの姿に感服し、汝良自身がシンシアを自らの幻想の中で愛し、自分勝手な「自由」を求めている自身の態度に対する反省であると言えよう。

これまでに見たように、汝良は自らの幻想空間の中でシンシアを象徴的な西洋として愛していた。汝良はシンシアの行動に接する中で、自分がシンシアを愛しているのではなく、「恋愛のための恋愛」であると考え、自らの自由を求めてシンシアと別れようと考えた。汝良はシンシアの結婚を聞き、「自分は馬鹿だった」「自分の愛する女性はもっと取り返しのつかないことをする羽目になったのではあるまいか——結婚のための結婚を」と、シンシアに対し軽蔑の心を持つ。しかし、彼のこれら浅はかな態度＝幻想も、彼が結婚式でのシンシアの現実と、それでも気強く振舞うシンシアの態度を見、それに感服して涙を流す。汝良がシンシアの結婚式において流す涙とは、シンシアとは対照的に、現実を見据えず、自分だけが浮き足立って結婚を考え、彼女の結婚の話聞き、軽蔑するといった、彼の一連の態度、彼の浅はかな「自由」の稀有に対する、反省の涙であると言う事ができるだろう。趙静は汝良がシンシアの結婚式に「失望」し、結婚式を抜け出す汝良の態度を「現実からの逃亡」とであると分析する (pp. 138-139)。しかしながら、私は汝良の「逃亡」を、彼自身の行動の「恥ずかしさ」からの「逃亡」ではないかと考える<sup>290</sup>。

結婚式が終わり、汝良は病気となったシンシアを見舞いに訪れる。

この世のものすべてに対する無関心が、淡く青い瞳からその色彩を奪っていた。彼女は目を閉じると顔をそらした。そのあごと首は極端なほど痩せて、粟の砂糖漬けをしゃぶったあとの、わずかに果肉をつけた種のような——汝良が描きなれた、額からあごにかけてのあの線をしていた。

汝良はそれ以降教科書に絵を書き込む事はなくなった。彼の教科書は現在とても清潔である。(p. 199)

以上のように、汝良により、〈理想／幻想〉の西洋として描かれていた輪郭の横顔には、現実のシンシアの辛い表情が描き込まれる。

物語の最後の一節で、張愛玲は語り手に汝良が「教科書に絵を書き込む事はなくなった」、と語らせている。この汝良の変化が意味するものは、先行研究にあるように、彼の西洋に対する態度が変化したことを意味するだろう。それでは、彼の変化はいかなるものだったのであろうか。

本稿における分析から考えるとすれば、汝良の変化とは「まだしばらくは若者でいたかった」(p. 196) 汝良が、シンシアの結婚という事件を通して、単純に西洋を理想として掲げる 1 人の若者でいることができなくなった。つまり、汝良が彼女との恋愛の経験を通し、「若いとき」に別れを告げ、「全てが万能である西洋」(p. 190) を単純に崇拜する自らの態度を改めざるを得なかったといえるのではないだろうか。

最後に張愛玲の小説と随筆を参考に、汝良の変化とシンシアの描かれ方に対する張愛玲の態度を考えてゆきたい。その中で張愛玲自身の人種観・文明観についても言及を行う。

#### 4. 張愛玲の文明観・人種観

汝良の自らの憧れである「万能な西洋」とは、これまでの分析からもわかるように、彼の理想像が描き出した幻想にすぎなかった。シンシアの現実から考えても、西洋が実際に「万能な西洋」であったのは、汝良が西洋を「万能」であると信じていたからにすぎなかった。

汝良は西洋に憧れ、西洋を自らのものにしようとしていた。しかしながら、彼は小説中において、自らが一度も所有した事がなかった西洋を失ったのである。これまでにも見たように、このような前半部分と後半部分の汝良の変化から考えて、この小説には「若いとき」といった成長を意味する題名が与えられているものの、汝良の現実認識に対しての、アイロニカルな批判が存在することは間違いがないであろう。

張愛玲は随筆「道路以目」(1944) で、製造中のケーキの香りと、実際に味わうケーキの味の差異について次のように述べている<sup>30)</sup>。

出来上がったケーキは、製造中のケーキに勝る事ができない。ケーキの真

髓とは、焼き上げる時の香りにあるのだ。教訓を受けるのを好む人は、この中からも教訓を得る事ができるのである。(p. 63)

汝良の行為は正に、幻想のシンシア、幻想の西洋を現実として味わう中で、彼が教訓を受けた物語であるということができるのである<sup>31</sup>。

それでは張愛玲によって描かれたシンシアはいかなる意味を持っているのであろうか。シンシアの描かれ方について、オリエンタリズムやポストコロニアリズムの理論を用いた研究においては、張愛玲がシンシアを植民者として描いているとの見解が示されている<sup>32</sup>。しかしながら、本稿における分析で見てきたように、私は張愛玲がシンシアを植民地における支配者として描いているとは考えない。

ここで張愛玲が他の作品において、上海や香港における外国人をいかに描いているのかを考えてみたい。

まず張愛玲が小説中や随筆において、ロシア人に言及している例を挙げてみる。張愛玲の作品に登場するロシア人は、短篇小説「第一炉香」(1943)における、中国人に仕える香港のピアノ調律師。随筆「燼余録」(1944)における、香港のロシア人日本語教師。「談跳舞」(1944)における、香港のロシア人の孤児と踊り子。「談音楽」(1944)における、張愛玲が幼い時に習っていたロシア人ピアノ教師。「双声」(1945)における、上海に住む白系ロシア人の境遇に関する話などがある<sup>33</sup>。

以上に挙げた例を見てわかる事は、張愛玲がそれぞれの作品に描いたロシア人たちは、皆、植民地の支配者としての地位を有していないことである。

彼らの職業は、1917年における10月革命と深い関連がある。1917年に起きた10月革命において、帝政ロシアは崩壊し、貴族階級の白系ロシア人たちは難民となってハルビンや上海、そして香港を訪れた。彼らの中には、乞食になるもの娼婦に身を落とすものも多かった。中には貴族生活において培った音楽の才能を生かし、音楽を生業としたものも多かったのである。彼らにとって音楽とは生活のためにお金を得る手段であり、唯一の精神的慰めのも場でもあった<sup>34</sup>。

他にも張愛玲は作品中で多くの外国人を描いている。そしてそこには一つの共通点が窺える。それは、「第二炉香」(1943)におけるイギリス人のロジャー、「紅玫瑰、白玫瑰」(1944)におけるイギリス人のアイス夫人、「桂花蒸、阿小悲秋」(1944)の国籍不明の外国人ガーダーであれ、彼らが皆、祖国を失いかけ

た西洋人、或いは亡命者だということである<sup>350</sup>。

張愛玲によって描かれた外国人の態度、彼ら自身の境遇に対する態度は、それぞれ、様々であるが、しかし彼らの態度は語り手や第3の人物の視線によって批判・嘲笑される。そしてそれは時に「年青の時候」における汝良のように、中国人にも向けられる。しかしながら、彼らの態度を張愛玲は、完全に批判するわけではない。張愛玲は彼らの態度や境遇を批判しながらも、その運命にくらかの悲哀を感じさせる<sup>360</sup>。

このような視点は張愛玲の文明に対する、以下のような態度を表しているのだ、と言えるだろう。

実際、社会の進展とはとても不可思議なものなのであり、個人によってコントロールすることはできないし、そのなかに身を置くものには、全くそれが本当のことなのか分からない。<sup>370</sup>

私は善悪の立場を取る事を好みません<sup>380</sup>。

これはつまり、ある特定の時代環境の中に置かれた人間の行動が、一個人の意志だけではなく、その周囲の環境の影響を受けて形成され、成立していることを意味する。そしてそれは、張愛玲が人間の態度と、その行動の行為の善悪とを、一個人の意志によるものだけではなく、時代環境にその原因を求めている事を意味している。

本論における分析、そしてこのような張愛玲の当時の文明に対する態度から考えると、張愛玲はシンシアを単に植民地における支配者として描いた訳ではない事が理解されるのではないだろうか。帝政ロシアは、かつて中国への領土拡張政策をおこなった<sup>390</sup>。しかしながら、そこで生み落とされたシンシアたちは、「不幸な種」<sup>40</sup>でもあったのである。

張愛玲はまた、隨筆において「極端な病態と、極端な覚悟を持った人は結局少ないのです。時代はこんなにも深刻ですから、そんなにもはっきりと悟る事はないのです」、「彼らは英雄でもありません。彼らはこの時代の広大な負担者です」<sup>41</sup>、と述べている。

そのため、「年青の時候」において、汝良が西洋に対する認識を変化させたとはいえ、彼の現在の態度が張愛玲により具体的・肯定的に示される事はない

し(可能であるかは判断が難しいが)、シンシアもより良い生活を目指し努力を行うことは示されない。

張愛玲は「自的的文章」(1944)で、次のように述べている<sup>120</sup>。

現在このような作品(ミケランジェロの「黎明」—河尻注)があったとしたら、自然と人々はそれに憧れを抱くかもしれません。しかし、それはないのです。そしてそれは存在する事ができないのです。なぜなら、人々はまだ、時代の悪夢から抜け出してはいないからなのです。(p.20)

このような未来の見えない混沌とした当時の時代の中で、張愛玲は自らが述べるようにもの寂しさ、〈荒涼観〉<sup>43</sup>を以って小説を描いていったという事ができるだろう。

## 5. おわりに

本稿では張愛玲の短篇小説「年青的時候」の分析を行った。本稿における分析の結果、主人公汝良の変化が意味するものが、先行研究における「自国の文化に対する自信」を示すものではなく、「万能な西洋」という彼の理想に対する、張愛玲の批判・文明観が存在すると結論付けた。また、「年青的時候」におけるシンシアの描かれ方を分析し、同じく張愛玲の文明観・人種観を分析した。

オリエンタリズムやポストコロニアリズムなどの理論を用いたこれまでの先行研究では、〈白人=支配者〉、〈中国人=被支配者〉という二元的な分割方法をもって分析を行っている。張愛玲の小説の中にも、以上のような要素が存在するのは間違いのない事である。しかしながら、本稿において見たように、張愛玲は必ずしも以上のような対立を以ってのみ作品を描いていない事がわかる。

また、本稿ではシンシアの境遇と結婚に対する態度を具体的に分析し、汝良のシンシアの結婚に対する態度を、趙静の述べるような「失望」ではなく、汝良の自身の態度に対する反省ではないかと結論づけた。張愛玲の外国人に対する態度は多様であり、シンシアの描かれ方、そして本稿において考察した張愛玲の文明観から、張愛玲がシンシアに対して同情的な感情を抱いていた事が理解されよう。

本稿では「年青的時候」を中心として考察を行ったために、張愛玲の文明観

や人種観についての詳細な考察が行われてはいない<sup>44</sup>。以上の点については、後の論考にて詳細な議論を行いたいと考えている。

#### 注

- 1 論中で用いるテキストは、張愛玲「年青的時候」(『第一炉香』皇冠出版社(1991)所収)とする。
- 2 趙静「伝統と近代の狭間—『年青的時候』の潘汝良—」(『立命館言語文化研究 12 巻 12 号』立命館大学国際言語文化研究所(2000)所収)
- 3 蔡源煌「従後殖民主義的観点看張愛玲」(楊澤編『閱讀張愛玲』麦田出版社(1998)所収)、溫毓詩「張愛玲本文中の人物心理與殖民文化研究」台湾中山大学(2000)
- 4 他に台湾の研究者高全之は、論文「閻魔與小鬼」(高全之『張愛玲學』大地出版社(2003)所収) p. 90 の一部分において、「年青的時候」を分析している。高全之は、近年台湾で増加してきている、張愛玲小説をオリエンタリズム・ポストコロニアリズムの視点から分析した研究に対して、張愛玲は西洋人(白色人種)を批判的に描いている訳ではないと批判している。
- 5 趙静(「伝統と近代の狭間—『年青的時候』の潘汝良—」『立命館言語文化研究 12 巻 12 号』(2000)所収)は、汝良がシンシアの結婚式において流す涙(p. 198)を、シンシアの情けない結婚に対する失望であるとし、「西洋風の結婚式の情けなさは、汝良に最後のショックを与えた」(p. 138)と、分析している。しかしながら、私は汝良のシンシアの結婚式における涙が、趙の述べるようにシンシアの結婚に対する失望から流されたものであるとは考えない。趙静の論文においては、シンシアの結婚に対する考察が詳細に行われていないと考える。そのため本稿では、シンシアの境遇と、彼女の結婚式にも焦点を当てて分析を行いたい。
- 6 蔡源煌は「従後殖民主義的観点看張愛玲」(前掲、蔡源煌「従後殖民主義的観点看張愛玲」楊澤編『閱讀張愛玲』(1998)所収)において、「私たちは、張愛玲の描いたその他の登場人物と比べて、潘汝良がやはり自国の文化に自信を持っていると大胆に言う事ができる」(p. 284)と述べている。また、溫毓詩は「張愛玲本文中の人物心理與殖民文化研究」(前掲、溫毓詩「張愛玲本文中の人物心理與殖民文化研究」(2000))において、「張愛玲は心理の成長過程の描写を借りて、潘汝良の西洋に対する予測と不正確な価値認識が破壊されるのを描き出した。潘汝良は植民者の卑屈さと曖昧さの中から覚醒し、自分の自由と尊厳を取り戻したのである」(p. 86)と、述べている。

- 7 高橋孝助ほか編『上海史』東方書店（1995）p.73を参考。
- 8 ともに、馬長林編『租界里的上海』上海社会科学院出版（2003）p.1。イギリスの小説家モームは、1920年代の上海の様子を描いた旅行記『中国の屏風』で、次のようなイギリス人の様子を描いている。「中国人なんか思いやりをかけちゃいかんのだよ。（中略）おれたちは支配者なんだ。（中略）中国人はこれまでいつも主人に服従してきたし、これからもそうだろうよ。モーム「ヘンダーソン」（モーム、小池滋訳『中国の屏風』ちくま文庫（1996）所収）p.66
- 9 ハリエット・サージェント、浅沼昭子訳『上海』新潮社（1996）p52
- 10 「年青の時候」にドイツ人に関する描写が存在する（p.193）。フランシス・クレイラー、黄婷訳「尋求認同：上海的独国外人社群」（前掲、馬長林編『租界里的上海』上海社会科学院出版（2003）所収）によると、上海のドイツ人はイギリス・アメリカ・フランスに比べて、中国を訪れた時期が遅く、政治的影響力はごく僅かなものであった。1914年の第一次世界大戦の影響により、彼らは工部局、そしてあらゆる外国人クラブから締め出しを受ける。1921年ドイツ・ワイマール共和国は、中国との間に和平協定のサインを交わすが、既にイギリス人とフランス人は、ドイツ人を平等に扱うことはなかった。1930、40年代にいたると、上海のドイツ人の多くはナチス党や、労働戦線に参加した。
- 11 横光利一は、著書『上海』（横光利一『上海』改造社（1941））の中で、白系ロシア人を次のように描いている。「自分たちの周囲に流れてくる旧ロシアの貴族のことを考えた。彼らの女は、各国人の男性の股から股をくぐって生活している。そうして男は、各国人の最下層の乞食となって…」（p.58）。
- 12 ハックス・ポット、濱谷満雄訳『上海の歴史—上海租界発達史』白揚社（2002）p.278
- 13 汪之成『上海俄僑史』上海三聯書店（1993）p.273
- 14 同書 p.273。植田捷雄『支那における租界の研究』叡松堂書店（1939）p.213によると、ソビエト政府は、1921年12月、全蘇中央執行委員会及び人民委員会の命令により、海外に居住する白系ロシア人とロシア人を、ソビエト政府によって承認せられざるもの（白系ロシア人）と、承認せられたるもの（ロシア人）とに2分した。
- 15 前掲、高橋孝助ほか編『上海史』（1995）p.17
- 16 物語中で汝良が映画「自由魂」の広告を目にすることからも、物語の設定が1943年代前半であることが理解される。映画「自由魂」は、1943年4月16日封切り。
- 17 武田泰淳「上海の蜃」（武田泰淳『武田泰淳全集第18巻』筑摩書房（1979）所収）p.123
- 18 前掲、高橋孝助ほか編『上海史』（1995）p.211

- 19 趙静（前掲、趙静「伝統と近代の狭間—『年青的時候』の潘汝良—」『立命館言語文化研究 12 卷 12 号』（2000）所収）、温毓詩（前掲、温毓詩「張愛玲本文中の人物心理興殖民文化研究」（2000））は共に論中において、それぞれ汝良の落書き（p. 184）、ドイツ語の教科書、コーヒーに対する憧れ（p. 190）、西洋の科学に対する志向（p. 190）などから、汝良の西洋崇拝を読み取っている。
- 20 上海の租界においては、19 世紀末から外国人によって、外国映画が上演されるようになった。第一次世界大戦の勃発以後は、アメリカ・ハリウッド映画の進出が著しくなる。高橋孝助ほか編『上海史』では、1920 年代から 1930 年代の上海都市文化について次のように述べられている。「豪華さを競い合うように林立する租界の外国系シアターでは、ハリウッド物などの外国映画がたっぷり楽しめ、ダンスホールやナイトクラブでは本場アメリカのジャズ演奏に耳を傾けることもできた、そして、上海一の大娯楽センター“大世界”にでかけていけば、そこには淫猥な楽しみもふくめ、さまざまな娯楽を満喫しようとする人びとの熱気でむせかえっていた」。前掲、高橋孝助ほか編『上海史』（1995）p. 194
- 21 前掲、趙静「伝統と近代の狭間—『年青的時候』の潘汝良—」（『立命館言語文化研究 12 卷 12 号』（2000）所収）pp. 132-133。張愛玲「自己的文章」、『流言』（1991）皇冠出版社
- 22 張愛玲「自己的文章」（張愛玲『流言』皇冠出版社（1991）所収）pp. 19-20
- 23 前掲、汪之成『上海俄僑史』（1993）pp. 88-89 を参考。
- 24 高全之は、前掲論文「『閻魔與小鬼』、高全之『張愛玲學』（2003）p. 90 において、シンシアを、白系ロシア人であると述べているが、彼女が白系ロシア人である事を示す具体的描写は、小説中には存在しない。また同論文で高全之は、張愛玲の短篇小説「桂花蒸、阿小悲秋」（1944）の登場人物ガーダーを白系ロシア人と述べているが、彼が白系ロシア人であることも、小説中で言及されてはいない。
- 25 前掲、蔡源煌「従後殖民主義的観点看張愛玲」（楊澤編『閱讀張愛玲』（1998）所収）、温毓詩「張愛玲本文中の人物心理興殖民文化研究」（2000）
- 26 前掲、汪之成『上海俄僑史』（1993）p. 262
- 27 モームは、旅行記『中国の屏風』の一篇、「晩宴会」において次のように描いている。「中国については全員がうんざりしているから話題にしたくない。中国については仕事に必要なだけのことしか知らないし、中国語を勉強している人間なんか不思議な目でしか見ない。伝道師か公使館の中国語専門担当以外、勉強する必要なんかなかろう。月給 25 ドルで通訳をやとえるじゃないか。中国語なんか熱心になる奴は頭がお

- かしくなるぞ。」モーム、小池滋訳『中国の屏風』（1996）p. 28
- 28 工部局で巡査をしていたものは、1934年の時点で、イギリス人が全体の57.79%を占めていた。ロシア人は7.39%。上海公共租界工部局の機構の中で、ロシア籍の職員は主なものに、警察所職員、即ち巡査、警務所予備隊と、ロシア籍の門番巡査がいた。下級巡査の給料は245元から246元程度。前掲、汪之成『上海俄僑史』（1993）pp. 758-759を参考。
- 29 前掲、趙静「伝統と近代の狭間—『年青的時候』の潘汝良—」（『立命館言語文化研究 12巻12号』（2000）所収）pp. 138-139
- 30 張愛玲「道路以目」（張愛玲『流言』皇冠出版社（1991））所収
- 31 張愛玲は隨筆「双声」（張愛玲「双声」張愛玲『余韻』皇冠出版社（1991）所収）p. 59で、「現在の中国とインドは実際、あまり良くないわ。外国に至っては、私たちイギリスやアメリカの、思想の中で育ってきたけれど、よく彼らの思想が破綻しているのを目にすることがあるわ」（p. 59）と述べ、西洋思想が有する破綻に言及している。
- 32 前掲、蔡源煌「従後殖民主義的観点看張愛玲」（楊澤編『閱讀張愛玲』（1998）所収）p. 282、溫統詩「張愛玲本文中的人物心理與殖民文化研究」台湾中山大学（2000）
- 33 張愛玲「第二炉香」（張愛玲『第一炉香』皇冠出版社（1991）所収）、張愛玲「燼余録」「談跳舞」「談音楽」（張愛玲『流言』皇冠出版社（1991）所収）、張愛玲「双声」（張愛玲『余韻』皇冠出版社（1991）所収）
- 34 榎本泰子『楽人の都・上海』研文出版（1998）pp. 84-85を参考。
- 35 ハリエット・サージェントは著書『上海』（前掲、ハリエット・サージェント、浅沼昭子訳『上海』（1996）p. 205）で上海に住む外国人について、次のように述べている。「外国人は自分が軽蔑している国でしか、権勢を振るうことができなかった。崇拜するイギリスへ帰れば、ただの人だった」。「桂花蒸、阿小悲秋」のガーターの国籍は具体的に知る事ができないが、「第二炉香」のロジャー、「紅玫瑰、白玫瑰」のアイス夫人はいずれもイギリス人である。
- 36 「第二炉香」において、ロジャーの事件は外枠物語の語り手によって、アイロニカルに提示される。詳しくは拙稿「『第二炉香』を読む—文明、人種の問題を中心に—」、「『多元文化』第5号（2005）、名古屋大学国際言語文化研究科多元文化専攻を参照にされたい。「桂花蒸、阿小悲秋」（張愛玲「桂花蒸、阿小悲秋」張愛玲『傾城之恋』皇冠出版社（1991）所収）で、ガーターは召使、阿小に「もしも上海にいないれば、外国の外国人は戦争に行つてとつくに死んでいるわ」（p. 124）と陰で避難される。また、「紅玫瑰、白玫瑰」（張愛玲「紅玫瑰、白玫瑰」張愛玲『傾城之恋』皇冠出版社（1991）

所収) pp. 75-76 で、上海の租界に住むアイス夫人は、イギリスに親族がないのに、イギリスへ「帰る」と言う。アイス夫人の態度は、彼女の自尊心を映し出すが、物語では同時にその哀れさも描き出されている。

37 張愛玲「談女性」(張愛玲『流言』皇冠出版社〈1991〉所収) p. 86

38 張愛玲「關於『傾城之恋』的老實話」(張愛玲『対照記』皇冠出版社〈1994〉所収) p. 103

39 中見立夫ほか著『満州とは何だったのか』(2004)、藤原書店 p. 382 によれば、阿片戦争の後の 1860 年、北京条約でロシアは清朝から沿海地方を獲得して、ウラジオストックという港湾都市を開くことになった。これによりロシアはアムール河でも満州に接し、東側でも満州に接することになった。1891 年ロシアはウラジオストックを基点とし、シベリア鉄道の建設を開始する。1898 年から着工された東清鉄道は 1901 年に開通し、その中央に生まれたハルビンは満州におけるロシアの都市となった。

40 張愛玲は随筆「造人」(張愛玲「造人」張愛玲『流言』皇冠出版社〈1991〉所収)において「もしも、彼が産まれて来る前に、全ての環境が彼に不利な状態であれば、彼が成功するチャンスは殆ど無いと言って良いだろう」(p. 138) と述べ、混沌とした時代に生まれる子供たちに対して嘆いている。

41 双方とも、前掲、張愛玲「自己的文章」(張愛玲『流言』〈1991〉所収) p. 91

42 前掲、張愛玲「自己的文章」(張愛玲『流言』〈1991〉所収) 麦田出版社

43 張愛玲は「『伝奇』再版自序」(張愛玲「『伝奇』再版自序」張愛玲『流言』中国文联出版公司〈1993〉所収) p. 186 で、「もしも私が最もよく使う言葉が〈荒涼〉だとしたら、それは私の思想背景の中に、そのような漠然とした恐れがあるからでしょう」と、自身の作品に対する思想を述べている。張愛玲は、原文では〈蒼涼〉という中国語を用いている。ここでは、日本語訳で同じ意味を表す〈荒涼〉という言葉を用いた。

44 張愛玲は自己の作品において、上海の租界や香港に住む外国人の他、混血児、華僑なども多く描いている。このような問題についても、以後の研究で詳細に検討を行いたい。

#### 参考文献

張愛玲、伊禮智香子訳「若い時」(丸山昇監修、佐治俊彦主編『中国現代文学珠玉選小説 2』二玄社〈2000〉所収)